

青森県立高等学校将来構想検討会議 三八地区部会（第3回）概要

日時：平成27年6月2日（火）

13:30～15:30

場所：八戸商業高等学校

<出席者>

三八地区部会委員

斗沢 一雄 地区部会長、赤坂 寿 委員、小向 龍悦 委員、
田名部 智之 委員、平間 恵美 委員、三上 雅也 委員

1 開会

西谷室長から、小向 龍悦 委員へ委嘱状を交付した。
事務局から委員を紹介した。
西谷室長から挨拶があった。

2 調査検討

地区部会長から、4月22日に開催された第2分科会において、「学校規模・配置について」の整理案が検討され、分科会長から各地区部会に対し意見照会があったことを踏まえ、本日の会議では、将来構想検討会議におけるこれまでの検討状況等について共通理解すること、意見照会のあった第2分科会整理案について当地区部会として意見交換をすることの二つの事項がポイントであり、このうち、第2分科会の整理案については、今後、地区の学校配置等に関する基本的な方向性を検討する基準となることから、この基準で良いかという視点で意見交換をしたい旨の発言があった。

(1) 将来構想検討会議におけるこれまでの検討状況について

事務局から、資料2、資料3及び資料4について説明した。

(2) 地区部会における検討の進め方について

事務局から、資料5及び資料6について説明した。

地区部会長から、「資料6にあるような生徒減少も見据えたうえで、当地区における将来の高校生の学習環境をより良いものとするためには、どういう学校の規模や配置のルールに基づいて検討する必要があるかという視点で、第2分科会の整理案について意見交換を行いたい。」との発言があった。

(3) 学校規模・配置について

事務局から、資料7、資料8及び資料9について説明した。

地区部会長から「資料7の第2分科会整理案について、項目で区切りながら意見交換を進めたい。」との発言があった。

「1 学校規模・配置に関する基本的な考え方」について

委員から、次のような意見があった。

- 前回の地区部会での意見を良く反映させてくださったと考えている。「高校教育を受ける機会の確保」と、「充実した教育環境の整備」の両方が大事である。

「2 高等学校教育を受ける機会の確保」について

委員から、次のような意見があった。

- 現在あるような高校の選択の幅があれば良いと思うが、今後人口が大幅に減るとなると、学級減だけでは対応できないので、学校数の維持も厳しくなると思う。
- 仕事や部活動の外部コーチの経験からすると、通学距離やスクールバス、市営バスの利便性を気にする保護者は多く、その親の思いをくみ取って、子どもが近い高校を選んでいるようだ。市営バスも市町村をまたいで運行することはできないので難しい。また、公立高校の場合、私立高校のような高校独自のスクールバスの運行ができないため、通学環境への配慮は必要だと思う。
- 高校の選択肢を確保することや、通学環境に配慮することは、ベターだと思う。自宅から近い場所に高校があればベストだが、将来そうはいかなくなる。市町村の財政支援や市営バスの運行等について、県が市町村等をお願いすることが今後あり得ると思う。県立高校の設置者は県なので、本来は県がやるべきことだと思うが、市町村の協力も必要である。

「3 充実した教育環境の整備」について

委員から、次のような意見があった。

- 重点校や拠点校を設置することは良いことだと思う。資料7の4ページ②にある普通科等の重点校の設置について、重点校の取組が複数記載されているが、このそれぞれの取組について全て重点校を割り当ててるのか。一つの取組に関する重点校は複数あると考えられるので、県内は重点校だらけになるのではないか。
- （事務局）例えば、青森高校は「医師を志す高校生支援事業」を地区の中心として行っている上、スーパーグローバルハイスクールにも指定されている。

一つの重点校が、複数の事業に取り組むこともあり得る。また、その取組も学校の実情や地域、時代のニーズによって変わると思うが、それらの取組を行う上で、ある程度の規模を持った重点校が必要だという考え方である。

- 重点校以外の学校は、重点校の取組を取り入れるということで理解している。「医師を志す高校生支援事業」のような取組については、予算措置等の国や県のバックアップが是非とも必要である。
- 重点校という考え方は良いと思う。重点校と重点校以外の学校があれば、それぞれ求められる役割の異なる学校を選択できるため、高校入学の選択肢が広がるのではないか。
- 併設型中高一貫教育については、導入すべきだと思う。併設型中高一貫校は、今は全国的に進学に特化した学校が多い。青森高校、弘前高校、八戸高校に刺激を与えるという意味でも効果はある。千葉県でも県立千葉高校が併設型中高一貫教育を導入した。千葉県は私立の進学校が増えているので、公立高校の浮上のために取り組んだそうだ。先程挙げた三校が県内の学校を引っ張っていくという意味で一つの方法ではある。

単位制は、現在導入されている学校を見ると、現実的に所期の目的どおりに運用されているわけではない。単位制は、科目選択の自由度が高く、学年の枠を設けずに所定の単位を取得すれば卒業できるものであるが、現状として、本県の単位制導入校については、科目選択の幅が決して広いわけではない。したがって、単位制の新たな導入については、理念どおりに本当にできるのかどうかを検討する必要がある。
- 現在、当地区の専門高校については、農業科、工業科、商業科、水産科の各学科が地域の産業とつながっている。職業教育を早い段階から学んで地域に就職する人づくりや、高校卒業後上級学校に進学するような人づくりも必要である。また、拠点校を作ってそのノウハウを波及させることができるならば、当地区については、水産科以外は必ずしも拠点校を置く必要はないと思う。拠点校も多く設置することはできないので、拠点校とそれ以外の学校との連携が重要だと思う。

「4 学校規模の方向性」について

委員から、次のような意見があった。

- 専門高校の拠点校の標準を4学級以上としているが、現状はどのような学校規模か。
- (事務局) 資料6にあるとおり、八戸工業高校が7学級、八戸商業高校が4学級、八戸水産高校が3学級である。

- 「オール青森」の視点で、学校規模の標準を4学級とする点については、三市については賛成である。しかし、それを維持できる市部と、その維持が難しい郡部とでは基準をそれぞれ設ける必要があると思う。拠点校が4学級以上というのは賛成だが、このように拠点校の基準を4学級以上とすると、徐々に4学級に向かっていくのではないかという心配をしており、地域の産業への影響が懸念される。
- 親の立場からすると、これ以上、学校は少なくなって欲しくない。三八地区は岩手県から来る子どももいるので、私立高校との兼ね合いもあるかもしれないが、本県の子どもにとって門戸が広がるような学校規模・配置にして欲しい。
- 重点校の6学級以上は妥当だと考える。「6学級以上」だから、7学級や8学級でも良いと思っている。しかし、「標準」という表現について統一した見解を出しておくべきである。「標準」という表現は、その学校規模を必ず守るという意味で考えている。というのは、学習指導要領による標準単位数は、守るべきものとして捉えているからである。
- (事務局) 事務局としては、柔軟性を持たせる目安という意味で「標準」と表現している。但し、この表現で適切に伝わるかという問題があるので、御意見をいただきたいと思っている。県立高等学校教育改革第3次実施計画では「望ましい学校規模」としたが、それでは「望ましくない学校があるのか」という指摘があった。
「標準」という表現については、「公立高等学校の適正及び教職員定数の標準等に関する法律」から文言を利用しているが、この法律では1学級の定員は40人を標準としている。しかし、本県では弾力的に運用し35人の学級も編制しているため、「標準」という表現には柔軟性があると考えている。
- ここで表現されている「標準」の意味合いについて、的確に説明できるのであれば、それで良い。
- 募集停止については、ダイレクトに通学できない地域ができないように配慮すべきである。また、通学支援については、例えば下宿にかかる費用の補助や、市外から通う生徒に対して交通費を補助することなどが考えられるが、県でできることと市町村でできることを明確にするべきである。
- 子どもが通える環境の整備か、下宿の配置など、生徒が通学するにあたっては、何らかの配慮をして欲しい。

「5 学校配置の方向性」について

委員から、次のような意見があった。

- 資料7「5 学校配置の方向性」にある「今後の方向性」のところに、「地域の意見を伺う」とあるが、ここで言う「地域」とはどの範囲を想定しているか。
→（事務局）資料9にあるとおり、第3次実施計画の説明会では県内6地区を基本として説明会を実施してきたが、次期計画では統合対象となる高校が設置されている市町村のほか、統合対象となる高校に通う生徒が住む地域を想定している。また、自治体のほか、高校関係者、中学校関係者、地域産業の関係者など、幅広く意見を伺うことを考えている。
- 第3次実施計画では計画の説明会を各地区で行っていたが、それとは異なり、協議会として計画作成段階から地域の意見を聞くことが必要である。単に県教委で計画したものを説明するだけでは、地域からの批判も多くなる。
- 確かな学力を付ける上で、ある程度の学校規模は必要である。それに伴い、募集停止や統合をすることも考えられるが、その際基準を示すことは方向性として良いと考える。但し、通学できない場合の支援は必要である。
- 募集停止や統合をすることは、当該高校の卒業生にとってショックを受ける出来事になるだろうが、やらなければ仕方ないことだと思う。そのような卒業生などが不満を抱かないためにも、前置きとなる基準は必要だと考える。
- 「新設による統合」という表現からは、現在高校が設置されている場所ではなく、通学環境等に配慮しながら新しい場所に高校を建設するものと受け取れる。その場合、それぞれの地域における将来の人口の減少等を踏まえ、設置する場所を検討してもらいたいと思う。
→（事務局）必ずしも新しく校舎を作るという意味ではなく、校名や校歌等を新しくすることを想定している。第3次実施計画では、例えば八戸北高校と八戸南高校が統合したが、実際には八戸北高校に吸収されるようなイメージになった。そうではなく、校名や校歌等も一新しつつ、校舎を利活用する形での新設を考えている。ただし、その表現の方法として「新設による統合」が良いか伺いたい。
- 4月22日に開催された第2分科会整理案では、「5 学校配置の方向性」の「（2）統合方法」の箇所が「新設による統合を基本とする」と書かれていたが、今回の整理案ではそれに「原則として」が付け加えられた。これは原則によらない場合があるということか。
→（事務局）「新設による統合を基本とする」では伝わりにくいという意見があったことから、「原則として」を付け加えた。

- 校長会でも、どちらかの学校が廃校になるような統合ではなく、新しいイメージが生まれるよう、校名等が新たな学校になる方が良いという意見で一致している。
- 一般市民のイメージでは、「新設」と聞くと期待感が高まる。がっかりするのは統合される高校の関係者だと思うが、過去の資料等がきちんと保管されているのであれば、ネガティブな感情は防げると思う。「新設」による統合そのものは良い案だと思う。
- 異なる学科の高校の統合により複数の学科を有する高校を設置することについては、学科によって設備が大きく異なるため、難しいと考える。共通している科目を学ぶ部分については良いと考える。複数学科を有する高校を設置する場合には、教育環境を考慮する必要がある。

「6 定時制課程及び通信制課程の方向性」について

委員から、次のような意見があった。

- 定時制は高校教育を受ける機会の確保として必要であり、6地区に置くことも賛成である。定時制課程の工業科についてであるが、時代に合った学科を設置するという観点からすると、生徒数が極めて少ない状況において継続していくのは難しいのではないか。
→（事務局）定時制課程の工業科では、概ねどの高校も各学年の入学生が20人以下である。
- 以前は働きながら学ぼうとする青少年のために定時制課程を設置していたが、今では様々な事情を抱え全日制課程に入学できない子どもの受け皿としての役割を担っている。全日制の生徒よりもむしろ学ぶ意欲があると感じる。そういう意味でも、定時制は存続すべきである。定時制課程の工業科の在り方については考えた方がよい。
- 定時制課程の工業科に在籍している生徒が少なく、学年によってばらつきがあるのは、そもそも希望する生徒が少ないのか、資格の取得等のために勉強するのに追いついていけないのか。
→（事務局）年度によって入学者数に開きがあるため、各学年の在籍数にばらつきがある。定時制課程は工業技術科という学科であり、全日制で行われている電気、電子、機械等の内容を組み合わせた幅広い内容を学んでいる。仕事をしながら資格を取得するという目的で入学している生徒は少ない。

「7 学校規模・配置とともに検討すべき事項」について

委員から、次のような意見があった。

- 情報発信については、例えば高校と産業界との情報発信や情報交換が必要と考える。現実問題として、八戸では地場産業の人手が足りないが、例えば高校側がそのような地域の状況を踏まえて教育し、水産高校で学んだ子が地域の働き手になって地域に貢献できるよう、高校と水産業が連携することが必要である。そのためにも、教育と産業、相互の情報伝達が求められると考える。

 - 例えば、島根県の隠岐島前高校は、かつて入学生が減少していた時に、町のバックアップを得ながら島外から生徒を募集し、集まった生徒に対しては町で塾を開き学習面のケアをした。その結果、県外も含め島外からも生徒が入学するようになった。高校の努力だけでなく、町全体で取り組んでおり、スーパーグローバルハイスクールにも指定された。全国からの生徒募集をやるなら、どの学校で全国募集を行うかということも含め、相当本気になってやらないといけない。

 - 普通科系の専門学科の在り方について再検討すべきではないかという意見が校長会で出されていた。例えば英語科については当初の役目を果たしているかどうかの問題である。現在、英語科は定員割れが続いている。また、グローバル教育については英語科ではなく、普通科で行うのが自然なのではないかという意見も出ている。さらに、普通科より学力が低いこともあり、英語科が当初の目的どおりに進められていないとの意見が他校の校長から出されている。英語科については単に一例だが、普通科系の専門学科の在り方についてしっかりと議論すべきだと提案したい。
- （事務局）この点については、第1分科会でも課題としてまとめられている。

本日の会議で出された意見を事務局が取りまとめ、それを地区部会長が確認した後、三八地区の意見として第4回第2分科会で赤坂委員から報告する旨の発言が地区部会長からなされた。

3 閉会